

芸術鑑賞会

12月7日（木）に文化センターで行われ、今年は伝統芸能として中国黄河大雑伎団の中国音楽と雑技を鑑賞しました。はじめの挨拶で団長のニーさんから、「みなさんを飽きさせません」という言葉がありました。中国舞踊や獅子舞、アクロバットの他、校歌の演奏や雑技の体験などもあり、内容は盛りだくさんで、生徒たちはとても楽しんでいました。

雑伎とは、いわゆる「サーカス」のことで、曲芸や奇術などの様々な芸能も「雑伎」と言うそうです。中国では、サーカスのほとんどが「中国雑伎」とよばれています。（以上「ウィキペディア」より引用）

最初に登場したのは中国風の獅子舞です。獅子舞はインドから中国、日本へ経由したと言われており、アジア地域各地で見られるものです。頭がよくなると言って、演技の後半は獅子が客席に降りて何人かの頭を噛んでいましたが、これもアジア各地で見ることができそうです。その次の女性舞踊は、変面と言います。踊る人の面が一瞬で変わったのがわかりましたか。この技は門外不出で、かなりのテクニックがいるそうです。

続いての胡弓（二胡）の演奏も素晴らしかったです。これはその名のとおり、弦が二本の楽器です。弦楽器は弦の数が少なくなるほど、正しい音階で音を出すのが難しいといわれています。この楽器は単純に音を奏でるだけでもかなり難しいそうですが、見事な曲を披露してくれました。



その後は、輪潜りや帽子を使っの小技等々、最後はホール天井までイスを積み上げて頂上に乗る芸を披露してくれました。大雑伎団の名のとおり、さまざまな芸を鑑賞した半日でした。

グローバル講演会

12月11日（月）に、トルコ人で地域おこし協力隊（町役場総務課）のアイシェさんによる「グローバル講演会」を開催しました。今回は、講師先生の話を一方向的に聞くのではなく、対話形式の生徒参加型で実施しました。もっとも、アイシェさんはすでにCGSトルコ班のメンバーとは顔なじみで、文化祭のシミット販売では色々お世話になりました。また、9月のイスタンブール高校のメンバーが来校したときには通訳をしていただき、調印式では共同司会もお願いしました。しかし、じっくりと、トルコのことや国際交流についてのお話を聞くのは初めてであり、とてもよい機会となりました。

トルコの紹介やアイシェさんの略歴などを話していただいた後、質疑応答を行いました。「日本人は働き過ぎ」、「日本人は「はい」と「いいえ」をはっきりしない」という日本人の印象を話してくれましたが、これはよく聞く話です。

講演後半のアイシェさんの言葉で、印象に残ったことが二つあります。一つは、「自分の町（故郷）を大事にしてほしい」ということです。串本（自分が住む地域）の良さは、わかっているようで、案外わかっていないものです。自分の町の歴史、文化、風土について理解し愛着を持つことが、相手の国や人を理解し愛着を持つことにつながっていくと思います。もう一つは、「世界に目を向けてほしい」という言葉です。トルコからはるばる日本にやってきて、串本で生活しているアイシェさんのこの言葉には、とても重みがあると思いました。

最後に校長先生から「アイシェさんのように自分の故郷のいいところを語れるようになってほしい」という話がありました。みなさんは、自分の町（故郷）の、どのようなところを話しますか。

司会と進行を担当してくれた生徒のみなさん、ごくろうさまでした。



以下は、感想文の一部です。●串本町には高齢者が多いので、克服すべき課題は私たち若い世代が率先して改善していかなければならないと思いました。今日の講演で色々考えることができたし、アイシェさんの母国に対する気持ち、日本に対する気持ち、串本に対する気持ちがとても伝わってきました。本当にとってもよい講演会だったし、よい機会だったとあらためて思いました。●今回の講演を聴くまでは、「串本町は好きだけど働くところは少ないし災害が怖いから早く串本を出て行きたい」としか思っていませんでしたが、アイシェさんの話を聞いて、周りから見た串本の良さ、「みんなとても優しく親切にしてくれる」（中略）など普通にしていること、あたりまえのことが実はとてもよいことで、すばらしいことなんだと気づくことができました。私は串本を出るつもりですが、校長先生も言っていたように、串本から出たとしても、串本の良さを他の人に話せるようになりたいと思いました。アイシェさんのおかげで、串本に住んでいることが誇らしくなりました。トルコのことも、もっと知りたいなと思いました。

人権映画鑑賞会

12月14日（木）に人権教育の一環として、映画「この世界の片隅に」を鑑賞しました。この映画は昨年公開されたもので、こうの史代さんの漫画を原作としたものです。昭和19年に広島市江波から呉に18歳で嫁いだ主人公すずを主人公にしたもので、戦中から戦後の混乱期をたくましく生きる姿を描いたものです。

鑑賞後の感想文を紹介します。●主人公が18歳という若さで知らないところへ嫁いで、最初はただでさえ苦しかったと思うのに、さらに戦争で空襲にあたり、大切な人を亡くしたりして、苦しい人生の話だと感じた。いま僕たちは、毎日学校に通い、ご飯を食べて、好きなことをして生活できているながら、毎日何かしら不平や文句を言っているのは、ぜいたくなことだと思った。戦時中の苦しさを乗り越えて、復興して、その時代の人たちが頑張ってくれたからこそ、いま生活できていることをあらためて感じた。いまは戦争もないし、ご飯はあるし、親は仕事をしてくれるから、自分はすべき勉強を頑張ろうと思う。●戦争は環境を変えるだけでなく、その戦争に関わった人たちの心の中までも変えてしまうだけで、何もよいことなどないと思うと、よけいに虚しく感じました。●いま送っているあたりまえの生活は、昔の日本ではあたりまえじゃなくて、今も世界のどこかで、私にとってのあたりまえの生活を送っていない人があるんだと改めて実感した。だから一日一日できることを精一杯して、悔いのない生活を送りたいと思う。

この映画の続編（ロングバージョン？）が制作されるという話があるそうです。ぜひ実現してほしいですね。

インターンシップ事前指導

12月19日（火）にインターンシップ事前指導の一環として、1学年の生徒たちが各事業所への電話アポイントを行いました。電話をかける生徒たちは緊張と不安が入りまじった面持ちでしたが、しっかりと電話のかけ方を練習したおかげか、みんなハキハキと話せていました。これから1月の事業所への事前訪問までに、準備しておくことも多々あると思います。ただなんとなくインターンシップの時間を過ごすのではなく、大人はどういう意識を持って職場で働いているのか。その職業はどのように地域に貢献しているのか、などいろんな視点からたくさんのことを学ぶ、良い機会となることを願っています。

またご協力いただく事業所の皆様には、この場を借りて感謝申し上げます。御指導のほど、よろしく申し上げます。



生徒総会

12月20日（木）6限、第1体育館において生徒総会が行われました。生徒会長の高田君（2C）が開会の挨拶を行い、議長選出の後、議事に入りました。

要望については「駐輪場に街灯をつけてほしい」（1B、1D）、「トイレに扉をつけて欲しい」（3A）、「製氷機を増やしてほしい」（3D）、「カロリーメイトの自販機を外に置いてほしい」（生徒会）、「校舎内の雨漏れを直してほしい」という要望が提出され、今後学校と交渉することになりました。その後、防災の取組についての報告があり、施設・設備、避難路、避難訓練についての提案が出されました。

